



拠点運営での取組報告

むらさきかん

8/23 受援力のススメ～受援力(頼るスキル)をミカタに活動をアップデートしよう！～

●総来場者数 31名

○本研修では、ボランティアとの良好な関係を築く団体の発表を通して、受け入れへの不安を和らげ、前向きに取り組む意識を高めることを目的に実施しました。むらさきかんによる「受援力(頼るスキル)」のミニレチャーや、NPO法人こえもじ、長瀬八幡宮見守り会、ONE RIVERによる事例紹介や、トヨタ自動車(株)の従業員によるプロボノの紹介を通じて、参加団体に必要な受援力を考える機会を設けました。アンケートでは「受援力の大切さを実感した」「自団体でも取り入れたい」との声が多く、受援力が「弱さ」ではなく「つながりを生む力」であることを共有できました。研修をきっかけにボランティア担当の設置や募集活動を始める団体もあり、市民活動の活性化につながる有意義な研修となりました。

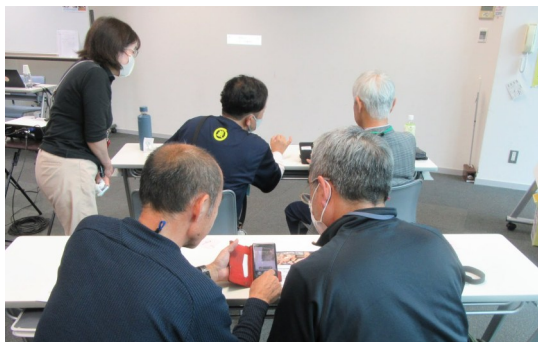


やはぎかん

①5/24 ②9/20 団体広報のために写真や動画を極めよう

●総来場者数 34名(①20名②14名)

○本事業では、写真や動画を活用した広報力の向上を目的に、初心者を対象とした実践的な研修を行いました。写真撮影では構図などの基礎を学び、団体活動をテーマに撮影と講評を実施しました。成果発表ではCanvaやChatGPTを活用した作品も見られ、学びを実践に生かす機会となりました。続く動画研修では「やはぎかん紹介動画」を共同制作し、鑑賞しました。同じ素材を撮影しても、撮影方法によって作品の印象が変わることを実感。体験重視の内容により、受講者からは「こういう内容ならまた参加したい」との声が寄せられ、好評価を得ました。悠紀の里「IT利活用研修」との連携によりデジタルツールのスキルが強化され、広報力向上と団体間交流の促進につながりました。



りた職員の思いを伝える！コラム

矢作に赴任して

矢作に赴任して約半年。地元の方と挨拶を交わし、顔見知りが増え、まちに愛着が生まれてきました。かつて「蓬里(よもぎのさと)」と呼ばれ、ヤマトタケルの矢づくり伝説から「矢作」になったというこの地は、矢作川とともに歴史を歩んできました。川がもたらす豊かな恵みと街道の往来。まちは大いに繁栄し、江戸期に架けられた矢作橋は東海道一の長大橋で、名所図会に描かれた岡崎のシンボル。一方で、幾度と起きる大水害は人々を悩ませ続けてきました。

先日、矢作町山車保存会の皆さんから、矢作の山車を紹介した本を寄贈いただきました。飢饉や水害といった天災に苦しみ、神仏への深い祈りがあったからこそ、矢作の山車文化はより壮麗で見事なものになったのだらうと記されていました。本のタイトルは「魂をひく」。山車を物理的に曳くことと共に、先人の魂を引き継ぐことを兼ねたタイトルかなと想像し、川が生み、橋が架けられ、山車が彩る矢作の奥深さを感じているこの頃です。



深田賢之(やはぎかんセンター長)

やはぎかんセンター長。一見、まじめで几帳面に思われがちだが、テキトーなところが結構ある。血液型がB型だと言うとだいたい驚かれる。意外と岡崎商工会議所青年部の要職をやらせてもらっていたり、長営館・おかざき塾代表も兼ねていたりする。

お問合せ	よりなん	59-3600	むらさきかん	66-3066	市民活動センター	23-3114
なごみん	66-8251	やはぎかん	33-3665	悠紀の里	57-5050	まち育て推進チーム
						23-2888

まちのミカタ

Litaracy

2026.1 vol.137

発行・編集



特定非営利活動法人
岡崎まち育てセンター・Lita

〒444-0031 愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6
TEL(0564)23-2888/FAX(0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com/
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布

岡崎市図書館交流プラザ・Libra/岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力

岡崎市役所各支所/岡崎市各市民センター/シビックセンター/
FMおかざき/杉くんの駄菓子屋/松應寺/cafeくらがり/

まちのミカタ

Litaracy

ーりたらしいー

137

2026年1月



特集

「住まいとコミュニティづくり」に取り組むまちづくり団体が集結

11月1日、ハウジングアンドコミュニティ財団(以下、HC財団)主催の「地域交流会in岡崎」が、図書館交流プラザリぶらにて開催されました。HC財団は、1993年より「住まいとコミュニティづくり活動助成」という30年以上の歴史を誇るまちづくり分野では著名な助成事業を行っており、りたは昨年度の本助成に採択され、西梅園地区の空き家と地域菜園を活用した地域再生事業を実施しています(本誌Vol.132参照)。

今回、りたはHC財団の依頼を受け、ホストとして地域交流会の運営をお手伝いしました。交流会には今年

度HC財団の助成を受けている19のまちづくり団体が全国から集まり、現在取り組んでいる活動の報告をしました。りたは、HC財団より助成を受けた西梅園のほか、QURUWAのまちづくりについて、岡崎市まちづくり推進課の中川さんとともに紹介しました。その後、リぶらから伊賀川～岡崎城公園～籠田公園～中央緑道～桜城橋とQURUWAを案内し、最後はオトリバーサイドテラスで乙川の夜景を眺めながら、参加団体の方々や財団関係者と懇親を深め、学びの多い1日となりました。

「住まいとコミュニティづくり」に取り組むまちづくり団体が集結

●「住まい」と「人」をつなぐ活動を応援するHC財団

まちづくり・地域づくりに取り組むNPOや市民活動団体にとって、活動資金の確保は大きな課題です。特に、制度的な対応や市場の形成が追い付いていないような地域課題や複合的なテーマに対峙する上で、必要な費用をいかに稼ぐか、あるいは人的なネットワークを駆使して費用をいかに抑えるかは、常に頭の痛い悩みです。

そんな先進的かつ意欲的なまちづくりの現場を30年以上にわたり支え続けてきたのが、HC財団の「住まいとコミュニティづくり活動助成」です。本助成の最大の特徴は、制度名にある通り「住まい(ハード)」と「コミュニティ(ソフト)」を切り離さず、一体的なものとして捉えている点です。「豊かな住環境には、物理的な場と良好な人間関係の両方が不可欠」という理念のもと、その両輪を支援対象とし、1993年の創設以来、延べ500件以上の活動を支援してきました。

現在は毎年20件程度の活動を助成(上限120万円/件)していますが、採択率は15%前後と狭き門となっています。その分、助成事業はいずれも先進性、実行性、波及性において高いレベルで、テーマも手法も多岐にわたります。

●「住まいとコミュニティづくり」活動助成の履歴から見るまちづくり史

HC財団のホームページには、これまでの助成事業すべての報告書が掲載されています(<https://www.hc-zaidan.or.jp/report.html>、りたの西梅園の取組は令和6年度の報告書に記載)。そのアーカイブをさかのぼると、90年代に住民参加のまちづくりの先進地だった東京都世田谷区のような様々な活動や、阪神淡路大震災や東日本大震災の復興活動はじめ、各地の名だたる地域・団体の取組から、知名度は高くなくとも切実な地域課題の解決にチャレンジする野心的な取組まで、日本のまちづくりの変遷を辿ることができます。

ちなみに、りたができる前に筆者ら(天野・三矢)が携わっていた世田谷区の「玉川まちづくりハウス」や「松陰コモンズ」、名古屋市の「まちの縁側育み隊」なども本助成を受けており、HC財団がいかにまちづくりの先達の“よすが”となっていたかをうかがい知ることができます。この度、りたの活動がこうした由緒ある歴史の末席に加えられたこと、また交流会の会場として岡崎市が選ばれたことは、個人的にも感慨深いものでした。

●地域課題を複合的に解決するアイデアにあふれた事例報告

今回の「地域交流会」では、右表の19の団体が活動発表を行いました。西梅園の活動に共通するような空き家や地域菜園を地域の交流の場として活用する事業や、福祉的なケア、分断されがちな多世代・多文化の共生、地域の憩いの場の創出、地域交通など、複合的な社会課題と包括的に向き合う事業が目白押しで、学びと刺激にあふれた交流会となりました。

岡崎の事例紹介では、りたと行政の緊密な連携関係が驚きをもって評価されたことが印象的でした。

本助成事業(1/9㍻切)に関心のある方は、HCのホームページをご覧ください。

「コミュニティ活動」助成対象

一般社団法人ユアセル	〔北海道札幌市〕
NPO 法人恩おくり	〔北海道江別市〕
網地島ふるさと楽好	〔宮城県石巻市〕
NPO 法人あっとホームたかまつ	〔茨城県鹿嶋市〕
NPO 法人玉川学園地区まちづくりの会	〔東京都町田市〕
一般社団法人 Life is	〔東京都多摩市〕
スパイスアップ SOZai 循環 Lab	〔神奈川県横浜市〕
乙女高原ファンクラブ	〔山梨県山梨市〕
石部豆講	〔滋賀県湖南市〕
一般社団法人みをつくし	〔京都府京都市〕
NPO 法人団地ライフラボ at 茶山台	〔大阪府堺市〕

「住まい活動」助成対象

一般社団法人えんがお	〔栃木県大田原市〕
くらとしよいるま	〔埼玉県入間市〕
一般社団法人ooo	〔東京都台東区〕
一般社団法人森と泉	〔神奈川県川崎市〕
NPO 法人綴る	〔石川県金沢市〕
NPO 法人かしむむら	〔岐阜県中津川市〕
九鬼町「事前復興まちづくり委員会」	〔三重県尾鷲市〕
豊栄アップサイクルビレッジ協議会	〔広島県東広島市〕

HC財団ホームページ▶



■ハウジングアンドコミュニティ財団より

当財団の本年度の「地域交流会」の開催地として岡崎を選んだのは、岡崎市と「NPO法人りた」様が協働して進める「QURUWA戦略」に象徴される先進的なまちづくりの姿勢に共感したからです。歴史ある城下町の風情から景観を読み解き、ユニークなビジョンのもと価値を創出しようとする取り組みが全国のまちづくり活動に示唆を与えるのではと期待したからです。

実際に岡崎で交流会を開催し、市民と行政が連携して街の魅力を高めている様子を肌で感じられたことは、参加者同士の学び合いにも良い刺激となったのではないのでしょうか。地域愛のもと伝統と革新を調和させようとする岡崎のまちづくりは未来に向けた力強さがあり、全国から交流会に参加された団体の皆様と当財団にとって新たな視点を得られる場となりました。深く感謝を申し上げます。

まち育てレポート

第10回岡崎アイデアソン

9月4日、岡崎市福祉会館6階ホールで、第10回岡崎アイデアソンが開催されました。参加者は、すべての人にとって暮らしやすい地域を目指す民間事業者・福祉職・行政職員など80名を超え、りたは岡崎市の地域包括ケアシステム支援事業の一環として、企画運営に携わりました。

アイデアソンとはアイデアとマラソンを組み合わせた造語で、テーマについて自由にアイデアを出し合うプログラムです。今回は「福祉と企業が協働する岡崎のこれから」と題し、民間・福祉・行政の枠を超え、複合的な福祉の課題を解決する共創アイデアを考える機会となりました。

はじめに、前回示された「安心できる居場所づくり」「力を引き出すコミュニケーション」「社会参加の機会」という3つのテーマを体现している取組の報告がありました。発表企業の一つのタツキ興業㈱は、高齢者や障がい者、ひきこもり経験者を短時間雇用し、柔軟な働き方で「社会参加の機会」を実現した事例を紹介。最初は従業員に理解してもらうことに苦労があったそうですが、回収が主たる業務の従業員にとって負担だった「ゴミ分別」の作業を切り出し、短い時間で役割をもって働くスタイルを整備。単発の仕事ではなく、継続的な雇用で安心して働ける仕組みに関心を持った参加者も多く、担当者に質問する姿も見られました。

その後のグループワークは、テーマ毎にメンバーをシャッフルするワールドカフェ方式で行われました。参加者は、上記3つのテーマについて、席替えしながら自由に意見を出し合うことで、ひとりでは得られない多様なアイデアに触れることができました。

提案されたアイデアには、企業内での介護予防講座「ポジティブシニア塾」、子どもたちと育てるグリーンカーテン、外国人との食を通じた交流会、一人暮らしの方を対象とした健康麻雀など、地域が元気になる「わくわくする」ものばかり。参加者からは「普段出会えない人と意見交換ができた」「自分の職場でも早速やってみたい」との声も聞かれました。

岡崎市は2040年を超えても高齢者が増え続けると推計されています。でもそれは課題だけでしょうか？少子高齢化を課題とするかチャンスとするかは地域をつくる私たち次第。だからこそ、「岡崎アイデアソン」から生まれたアイデアが、多様な主体の連携のもと、誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながることを期待し、りたは支援をしていきたいと考えます。



▲事例発表・ワーク発表の様子

りた's Eye

福祉の現場の声を聞くと、貧困や引きこもり、ネグレクトなど、メディアで目にするような福祉的な課題は、気づいていないだけで私たちの身近にあることがわかります。まずはそんな「ほっとけない」状態を知り、出来ることを持ち寄ることが協働・共創の第一歩。これまでアイデアソンを通じ、終活を楽しみながら学ぶ「人生ゲーム」や、異業種の方々が焚き火を囲みながら交流する「ぶっちゃつけBBQ」など、様々な取組が生まれています。今後もこうした福祉の輪を広げる機会を設けていきますので、ぜひご参加ください。

Topics

「恵田のよりよい未来を考える作戦会議」開催

岡崎市北部に位置する恵田学区は、市街地から15分ほどの場所にあり、自然豊かな地域です。駒立のぶどう園や恵田小の「落ち葉スキー」など特色を持ち、30年ほど前には花園と呼ばれる団地もできました。ところが人口減少は如実で、小学校の規模を維持するために学区外からの越境通学を認める「特認校制度」の対象となる地域でもあります。

その恵田学区で、地域住民が学区の未来を真剣に考えていくために「恵田の未来を考えるアンケート」を実施しました。学区出身者を含む中学生以上が対象で、回収率は78%を超え、関心が高いことが伺えました。

同学区に住み続けられない理由は交通手段や商店が無い不便さにあることが顕著である一方、空き農地・空き家や小学校との連携など地域資源の活用や、草刈りや夏まつりのお手伝いに意欲的な方がいることも分かりました。そこでこの結果を踏まえ1月25日(日)に「恵田のよりよい未来を考える作戦会議」を開催します。りたは恵田学区の持続可能な地域づくりのために設立された久楽志隊(くらしたい)と共に、住民の「住み続けたいまち」づくりを進めていきます。